

ポストモダンへGO

朝日新聞編集委員
大西若人
Wakaro Ohnishi



オルターモダン。「別の近代」を意味するこの言葉を耳にしたのは、一月に東京芸術大学で行われたフランスの美術批評家ニコラ・ブリオの講演会だった。資本主義にかわるグローバルゼーションのあり方を探ろうという訴えなのだが、私の理解では、彼はポストモダニズムを「多文化主義だが、ルーツや過去を意識しすぎた」と否定的にとらえているようだった。

一九八〇年代に学生生活を送った私は、当時全盛だったポストモダン建築にどっぷり浸り、魅了されたクチだ。その流行を実質的に支えたバブル経済が崩壊し、さらに二十一世紀になっ

て否定的に語られるようになった今でも、愛着を感じている。だから、ブリオのような言い方をされると、ちょっと寂しくもあるし、抵抗したくもなる。こう感じるのも、ポストモダンやポストモダン建築がある一面では再評価してもいいのでは、と思わせてくれる文化施設が昨年相次いで竣工したことも大きいと思う。

坂茂の設計で二〇一七年末に静岡県富士宮市に完成したのが、静岡県富士山世界遺産センター。外観の一部が「逆さ富士」のような逆円錐になっていて、それを更に水盤に映り込ませて正立させるという仕掛けがある。富士山につい

て伝える施設をデザインするに際し、素朴に山の形にしているのは本物の美しさにかかわらない。坂は、かつて山中湖で見た逆さ富士の美しさを感じだし、今回の案を思いついたという。

同時に、分かりやすい形を通して「愛される建築にしたかった」と坂は話す。この「分かりやすい姿で多くの人々にアピールする」という考え方は、機能的だが退屈な箱形建築に堕してしまうことの多いモダニズム建築に対して、大衆にアピールすることを唱えたポストモダン建築の発想そのものではないだろうか。

違う部分もある。ポストモダン建築が、歴史

や土地の文脈に連なる形象を遊戯的に表層にまとうことが多かったのに対し、この逆円錐の部分にはちゃんと機能があり、内部は展示空間になっている。訪れた人はらせん状のスロープを上り、映像などを見ながら登山を疑似体験できる。登り切ると、ピクチャーウインドウを通して本物の富士山を拝むことができるのだ。

内藤廣が設計し、一七年に開館した富山県美術館の場合、大きなガラスの壁面越しに、あるいは屋上から勇壮な立山が見えて大人気だ。家族連れやカップルを呼び込んでいる。

この美術館の場合、外観が奇抜というわけではないが、立山の眺望という魅力を建築に取り込むことで、やはり多くの人にアピールする「愛される建築」が目指されている。現時点では見事に成功している。

冒頭に紹介したブリオは、一九九五年に「関係性の美学」という概念を提唱したことで知られている。彼が企画した美術展では、自立性を備えた絵画や彫刻よりも、制作プロセスや他者との関係を重視する現代美術作品が多く紹介された。才能豊かな作者がすべてをコントロールして制作する、といった西洋近代的な発想を否定的にとらえた作品選択ともいえた。

これは、さきほど言及した坂茂や内藤廣の作品にもあてはまる。富士山世界遺産センターも富山県美術館も、風景や市民、来館者との関係をととても大切にしている。

もともと建築は、アートの比べて社会的な存在だといえる。地球上で物理的に空間を占める以上、機能はもとより、社会や経済、法規、利用者、地域、歴史との「関係」を持たざるを得ない。そして、坂や内藤の作品を含め、近年はそのことがより重視されているといえる。税金が投入される分、厳しい目が注がれ、より広い層の利用者が見込まれる公立の文化施設の場合には、なおさらその傾向が強いはずだ。

平田晃久が設計し、一七年春に開館した群馬県の太田市美術館・図書館は、とりわけ「関係性」に重きを置いた建築といえる。

東武・太田駅の北口を出てすぐに現れる白いハンバーガーのような建物は、展示室や閲覧室が入る二〜三階建てのハコの周囲にスロープが絡みつき、立体交差しているがゆえの姿だ。駅側の入り口には賑わうカフェがあり、屋上は緑化された庭園になっている。美術館と図書館の機能が空間として相互に関係を持ち、都市の外部空間ともつながっている。

コンペで選ばれた後にもワークショップを繰り返して、設計を変更してきた。その意味では市民とも設計段階から確かな関係を築けていたといえる。平田が唱えている「からまりしろ」なる概念の具現化であり、「目的がなくても歩きたくなる街のような場所」という狙いが実現している。この建物が持つカジュアルな表情と、市民に愛されやすい仕掛けづくりは、やはりポストモダン建築を、単なる形としてではなく、考え方の部分で継承し、より洗練、発展させたと考えてよいのではないか。

ポストモダン建築は、どうしても「バブリーな形態のお遊び」と捉えられがちだが、現実や過去を相対化、批評しようとする精神や、他者と関係を持つとする姿勢は、あらゆるものが数値で評価され、建築に厳しい目が注がれる今こそ、有効なものではないか。それがポストモダンと呼ばれるように呼ばれまいと。あるいは、オルターモダンと呼ばれようと。

と、この原稿を書いているときに、英王立芸術院（ロイヤルアカデミー）が、第一回のRA建築賞に長谷川逸子を選んだというニュースが飛び込んできた。言うまでもなく彼女もまた、ポストモダン期に頭角を現した建築家なのだ。